キリストのかたち(10) みことばに生きる幸い　　コロサイ 3：16、マルコ 4:2〜9

１．みことばが豊かに住む。

「キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。」このみことばの「住む」という言葉は「誰かといっしょに一つの家に住む」、つまり「生活を共にする」という意味があります。一つ屋根の下で生活をすること。私たちは物体ではなく人格的に造られていますから共に生活をするということは良くも悪くも互いに影響し合っています。つまり何かの変化が起こらざるをえません。それは「みことばを覚えています。」「その意味も分かります。」というところで終わるのではなく「そのみことばは私にこのようにするようにと迫ってきます。」と言うように何らかの応答や行動を求めてくるということです。みことばに「豊かに住む」とありますがそれは住んでいる者同士が親密な関係にあることを示しています。親密であるからこそ、そのみことばに応答することが喜びであったり、自分らしさというものを確認したりできるのです。

ところがその逆にローマ 7:17-20 では「わたしのうちに住んでいる罪」という言葉が繰り返され、罪が人の内面に「住みついて」離れない様子が描かれています。一緒に生きているわけですから人は住みついた罪を自分の力で追い出すことはできません。どれだけ頑張っても自分に住みついた罪を自分から外に出すことができない。まさに獅子身中の虫のような存在です。それで、ローマ人への手紙を書いた使徒パウロは自分の罪に対して無力な自分のことを「私は、本当にみじめな人間です」（ローマ 7:24）と嘆いています。しかし、この嘆きは、イエス・キリストによって勝利の喜びにかわりました。なぜかと言いますと、イエス・キリストを信じる者には、罪にかわって聖霊がその人のうちに「住んで」くださるからです。そして、聖霊が宿り、住んでいてくださる人にみことばが「住む」のです。

この「住む」という言葉に似た言葉に「根を張る」「確立する」という言葉があり、コロサイ 2:6-7 に使われています。こう書かれています。「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」信仰が根を張り、確立するためには、信仰者のうちにみことばが根づき、確立しなければなりません。普通、植物の根は土に隠れていて、人々の目には触れません。根を深くはっていないと木は高く伸びることはありません。根を広く張らなければ、木はその枝を伸ばすことはできません。「みことばに生きる」というのは、植物が「根づく」のと同じように、人目にあまり触れない、地味な信仰の行為です。しかし、このことがしっかりできていなければ、決して信仰の成長も実りもないのです。また何かあった時にもうまく対処できません。

2.みことばが根付くことを妨げるもの

では、「みことばが根づく」ためには、具体的に、どうしたらよいのでしょうか。イエスは、そのことを「種まきのたとえ」で教えておられます。「種まきのたとえ」は、よく知られているように、農夫が畑に蒔いた種のうち、あるものは道路や岩地、また茨の中に落ちて実を結ぶことはなかったが、よく耕された畑に落ちた種は、そこに根をおろし、成長して、多くの実を結んだというものです。ここでは種とはみことばのことです。そして落ちた土地とは私たちの心のことを言っています。この譬から、みことばを住まわせる、根付かせるとは、私たちの心を畑地のように柔らかくして、みことばを受け取り、みことばの持ついのちを育むことだということが分かります。そのためには、みことばを根付かせるのにふさわしくないものに注意し、それらを避ける必要があります。みことばを住まわせるために避けるべきもの、それは「道端」、「岩地」、「茨」で表わされています。

第一に「道端」について、イエスはこう言われました。「道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。」（マルコ 4:15）「道端」とは道と畑の境目になると思います。草木の陰になっていて何となく雰囲気的に種は畑にあるように思えても実際は固い道の上にあります。つまり根付いていないのです。それは

聞いてみことばは覚えていてもの神の言葉をほんとうには聞こうとしない態度を意味しています。信仰者であれば毎日聖書を手にとって読み、毎週、教会で聖書を学び、説教を聞かれているでしょう。しかし、神の言葉を目で読み、耳で「聞」いても、それを心で「聴」いていないということがあります。日本語で「きく」という言葉には「聞」と「聴」のふたつの漢字をあてることができますが、神の言葉に対しては、「心」という文字が入った「聴」という漢字が。神の言葉は聞き流してよいものではなく、注意深く耳と心を傾けて聴くべきものです。「道端」、それは多くの人や動物によって固く踏み固められています。同様に、わたしたちの心も、自分自身の信念や体験、また、この世のさまざまな情報や教えによって、すでに踏み固められてしまっている部分が多くあります。すでに踏み固められた偏見や価値観、自分の主張によって神の言葉を判断してしまうなら、そうしたところには神の言葉は根づかず、宿らないのです。そしてみことばの種は吹き飛ばされたり、ここでは鳥に食べられてしまうことになるのです。みことばに聴いているかどうか、それはどのように私が応答しているかによって分かります。

第二に「岩地」について、イエスはこう言われました。「,岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」（マルコ 4:16,17）「岩地」は「道端」と違って、薄い土の層があり、短い根を張ることができます。それはみことばを受け入れているということです。しかし、それは表面だけで、内面にはみことばが根をおろすことのできない固いものがあるのです。

ほとんどの人は、聖書の言葉を喜んで聞きます。聖書には、人々の心の求めにこたえることのできる、あらゆるものが含まれているからです。それは、文学としても、歴史としても、また、人生の処世訓として学んでも興味のあるものです。たとえ、そのような形で神の言葉を聞いたとしても、人は何らかの真理に触れることができます。それは否定しません。聖書によって啓発され、感動し、また、その一部を実行するようになるでしょう。しかし、ほんとうに神の言葉に聴くというのは、それ以上のことです。わたしたちの内側にある固い岩地。それは「困難や迫害が起こると」と書かれています。信仰を持って生きようとするとそれを阻む様々な困難や迫害が起こることがあります。また種が蒔かれる土地とは私たちの心のことですから、固い岩地とは今まで生きてきた中で強いて持たされてしまった不条理なこと、何らかのコンプレックスあるいは心の傷とも考えられます。調子のよい時には素直に聞けるけれども何か心の傷とかに触れたりすると激怒したり、心を閉ざすということがあるのです。それが何にせよ神によって砕いていただき、また癒していただき神の前に謙虚になって、罪の赦しを乞い、イエス・キリストを救い主、また「主」として心に、生活に、人生に迎え入れられたならば本当に感謝です。神の言葉がそのようなものとして聴かれるとき、はじめて、それはわたしたちのうちに根をおろし、宿るのです。

蒔かれたみことばの種は、道端では芽を出すことはありませんでした。また、岩地では芽は出たものの、根をおろすことができませんでした。

第三の「茨」の中では、芽を出し、根をおろしましたが、茨の勢いに負けて、それ以上は成長しませんでした。イエスは、この「茨」について、こう言われました。「もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。」マルコ 4:18,19 ルカの福音書には「快楽」ルカ 8:14 ということばも使われています。

「富の惑わし」と「快楽」が神の言葉に聞き従うことからわたしたちを引き離すことは、誰にもよく分かります。しかし、わたしたちを神の言葉から引き話すのは「富の惑わし」と「快楽」だけではありません。「この世の思い煩い」という大敵があるのです。「自分にはそれによって誘惑されるほどの財産は無いし、酒や異性に入り浸るような生活はしていないから大丈夫だ」という人であっても、日々の生活や仕事で、心配ごと、恐れ、思い煩い、不平不満などのない人はおそらくないでしょう。この世に生きる限り、どんな心配ごともなく生きるということはできません。毎日の生活にはさまざまなプレッシャーが押し

寄せてきます。みことばは、わたしたちに思い煩いを神に委ねるようにと教えるのですが、私たちが「そんなことぐらい分かってる。でも私には私の考えがある」などと神への信頼を見失ってしまうと神の言葉は、「この世の思い煩い」という「茨」の中で窒息してしまうのです。そして、普段はみことばの言うことを無視して歩みながら、困難を迎えた時に「なぜ神は私を助けてくれないのかと文句を言いだすのです。」茨はどんどんと生えてきたら、それを取るという作業も必要になってくるでしょう。生活の中で何が一番必要かという、優先順位ということが大切なポイントとなります。たとえそれが良いと思えることや、決して悪いことではないことでも、自分のしていることが自分の心を占領し、みことばを聞き、学び、覚え、黙想し、実行する時間さえも奪ってしまうなら、たとえ良いことや悪くないことでも、みことばを塞ぐ「茨」になってしまうのです。もう少し、信仰生活の断捨離が必要かもしれません。

３．みことばが生み出す豊かな人生

「みことばが私の内に住む」あるいは「みことばが根付く」ということは、神の言葉がすこしばかり芽を出せばいいとか、かろうじて生き残りさえすればよいということではありません。コロサイ 3:16 は「キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。」と言っています。神がわたしたちにお与えくださる力や恵みはけっして小さなもの、貧弱なものではありません。それはいつでも大きく、力強く、豊かなものです。

わたしたちはこの豊かな恵みを求めます。それを求めるかぎり、わたしたちのうちに「道端」や「岩地」、また「茨」があったとしても、あきらめることはありません。聖書には次のような言葉があります。「あなたが御霊を送られると彼らは創造されます。あなたは地の面を新しくされます。」詩篇 104:30

「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」エゼキエル書 36:26

これらは皆、イエス・キリストによって与えられる救いを指し示す預言です。わたしたちが神の恵みの約束を信じ、悔い改めて祈り求めるなら、踏み固められた道端を柔らかい地とし、岩地から岩を取り除き、茨を一掃する、神の力あるわざ、恵みのみわざを見ることができるのです。たとえ、今まで、みことばを根付かせることに心を向けられなかったとしても、今からでも、もういちど、この聖句に立ち帰りましょう。みことばを豊かに宿し、それに満たされ、生かされるというゴールに向かっていきましょう。